



The Christian Science Journal, September 1960

『キリスト教科学さきがけ』、1962年1号

「神の客」

“The Guest of God”

Takashi Oka / 岡 孝

神の国には、見知らぬ人も、外国人も、不安なよそ者もいない。ここでは、誰もが、神の国、すなわち、すべてを含む霊的領域の市民として、永久に安心してくつろげるのである。

メリー・ベーカー・エディは、この真理について、『**科学と健康—付聖書の鍵**』の中で、次のような美しい言葉で書いている：「地上の巡礼者よ、あなたの住家は天国である。見知らぬ人よ、[よそ者よ]、あなたは**神の客**である」(p.254)。

「神の客」となるということは、いつでも喜び迎えてくれる**愛**、すなわち**神**に、抱かれていること、**心**、すなわち知性の、尽きざる資源に預かること、**生命**の豊かな自発性を吸い込むこと、そしてまた、**霊**を段階を経ずに知る喜びであることを、わたしは知った。それはまた、**魂**の完全さを、**真理**の誤らぬ確実性を、認めることである。それは、不変の、神性の**原理**の主権、支配、法律に、意識的に従うことである。

Author's Name / Takashi Oka

他の日本語記事については、次をご覧ください：<http://www.spirituality.com/christiansciencesakigake/index.jhtml>

© 2010 The Christian Science Publishing Society (CSPS)
この記事は、50部までプリントアウトして、非営利として実費で提供することができます。この記事を手紙（email）で送ったり、ウェブサイトに載せたりすることはできません。代わりに、CSPSのウェブサイトに掲載されているこの記事へのリンクを、メールしたり、ウェブサイトに載せたりしてください。この記事を手紙に転載する許可を得るには、copyright@csp.com宛に、メールをお送りください。件名は、英語で“Copyright Request”としてください。

「神の客」となることは、考えの中で、**神**と一つになること、すなわち、人が**神**の反映として、今、自分の**創り主**と一つであることを意識し、それを行動で表すことである。**キリスト・イエス**は、自分がかつて告げた言葉、「わたしと**父**とは一つである」(ヨハネ 10:30)が、真実であることを、終始一貫、地上での仕事を通して自ら実践した。

人が**神**と一つであることは、逆らえない事実であって、それは、見知らぬ人とか外国人という考えを、間違いなく消去することを、誰にでも可能にしてくれる。あたかも大小さまざまな障壁だらけのように見える、この人間社会において、人が**神**と一つであるという科学的な事実は、神性の法則として働き、国家の対立をほどこき、旅行とか国籍などに関する煩雑な条例などを、ほぐすことができるし、実際にほぐしているのである。

日本で生まれ、育ったわたしは、アメリカの大学で学ぶことを熱望していた。しかし、この夢は、第2次世界大戦とその戦後状況のため、全く実現性がないように思われた。そこで、**キリスト教科学**の実践士に祈りによる助けを求めたところ、実践士はわたしに、真実の自己に目覚めるように忠告してくれた。彼女は、真実の自己は、永久に**父**なる**神**と共にあり、戦争、国籍、その他どんな制約にも縛られないことを述べ、私がこの真理を十分に理解できるように話してくれた。そして、わたしのために祈ってくれたのである。

この忠告に従って、わたしは**神**と一つであることを自分に言い聞かせ、これが、今、現在、唯一の事実であることを認めていると、もろもろの心配が消え去っていった。そして、アメリカ留学も実現し、自分があこがれていたプリンシピア大学で豊かな学生生活を経験する

Author's Name / Takashi Oka

ことができた。卒業が近づき、ハーバード大学から寛大な奨学金を受けることになったが、母校プリンシピアから英文学教師としてしばらく大学に残らないかという誘いを受けた。ハーバードへ行くことについては、法的に何の問題も無かったが、母校で就職することについては、外国人学生という身分から、必然的に複雑な手続きが必要とされ、それらが解決するという保証は何も無かった。

しかし、またとない機会なので、わたしは後者の道を選び、あまたの法的障壁と取り組み始めた。何ヶ月かが過ぎたが、障壁は依然として残っていた。後ろを振り返って、馬鹿な選択をしてしまったものだと、後悔する誘惑に強くかられた。

その時、わたしはエディ夫人の「人」についての描写を思い出した。次がその一部である：
「...**神**から離れた心を持たないもの；**神格**から派生しない性質は、一つも持たないもの；自らの生命・知性・創造力は持たないが、**造り主**に属するものすべてを、霊的に反映するもの」
(『**科学と健康**』 p. 475)。わたしは、この描写は、わたしの真の自己に該当し、そしてまた、故国を含むすべての国のすべての市民に該当することに、気がついた。

また、**神**と一つであることは、個性をあいまいにすることではなく、人が**神格**に吸収されてしまうことでもないことに気がついた。むしろそれは、**霊**の無限の個性と多様性を反映することを意味していた。また、人が**神**と一つであるという真実は、ある時は実行され、他の時には無視されるというものではなかった。

Author's Name / Takashi Oka

わたしは、周りの人たちは、**神**から離れた限られた心を持つものであると認めてしまったら、わたし自身が無限の知性を享受するなどということを、期待することはできないことが分かった。**神**の法則が、わたし自身のために働くためには、わたしの周りにはいる人たち誰にでも、また、自分が交渉する役人すべてにも、同じように働いていることを認めなければならないのであった。そればかりではなく、ワシントン、東京、モスクワ、その他世界のあらゆる国の立法者、政府指導者にも働くことを、理解しなければならなかった。要するに、わたしの隣人たちから、わたしだけを切り離して、**父**と一つになることを達成するなどということは、望めないことだった。

短気になり、イライラする気持ちは、自分の考えを、**神**と一つである、**神**と和合するという、霊的事実に委ねているうちに、消えていった。しかしながら、状況は変わらず、気落ちしそうだった。結局、効果のない手紙のやり取りを何ヶ月も繰り返したのち、出入国手続きをする政府機関の地方事務所まで、一晩泊まりで出かけて行き、担当の政府役人と直接会うことにした。

その途上、わたしは、**神**と一つであることは、同胞を含むすべての人間に該当することを、それまでになくはつきりと理解することができた。**神**の業はすでになさされていて、わたしに課せられた仕事は、この事実を証明すること、それだけであった。会見は、形式張らず、友好的なものだったが、その役人には、実際に助けてくれることは、何もできそうにないようだった。ついに、役人は、午後1時まで休憩しようと言った。

Author's Name / Takashi Oka

わたしは、それまでの時間を近くのキリスト教科学読書室で過ごすことにした。エディ夫人の著書を読み、自分も役人もみな誰もが、神、一つの心の、個々の表現であって、神、一つの心、以外の何ものにも支配され得ないという真実をあらためて確信し、喜びさえ感じるようになっていた。約束どおり、一時に出入国事務所に戻ってみると、役人は、わたしが求めている事柄すべてを認可する、公式の手紙を渡してくれた。

この経験を通して、わたしは、人が神と一つであることを実証するには、不断の実践と自律が必要であることを学んだ。また、それは、ある瞬間は確信し、次の瞬間は棚上げするようなものであってはならないこと；そしてまた、神の子らすべての個性であり、権利である、完全に満足できる自己を照らし出すために、自分が日々大切にしている個人的な信念を、捨て去らなければならないことを悟ったのである。

「子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ」（ルカ 15:31）。人が神と一つであることを、終始一貫して認めていると、人間の心のめくら滅法の手探りや、激しく振りまわされる欲望が取り除かれて、神の子としての生来の相続財産である豊かな霊的資源が、それぞれに直ぐに役立つものとなるのである。こうして、孤独なよそ者、家なきさすらい人も、自分は実は、常に「神の客」であることに、目覚めるのである。

岡 孝氏は、長年ジャーナリストとして活躍し、The Christian Science Monitor 紙の東京、モスクワ、北京、パリ特派員などを勤めた。

Author's Name / Takashi Oka